

かがやける都市

* 文中敬称を省略します。

都市研究センター 研究理事
渡辺 直行

はじめに

太陽輝ける都市を見ていたら、ル・コルビュジェの「かがやける都市」を思い出した。これは都市計画関係者の間では「近代的都市」の原型として認識されているらしい。筆者自身はその世界のことは知らないのですが、真偽の程は分からないが、現実にながれわれが東京で目にする都市空間は「かがやける都市」とは異質のもののように感じるし、これまでの都市計画が「かがやける都市」を目指してきたという感じもしない。それはむしろ別種の「かがやける都市」になってしまうような気もする。本稿ではそのようなことを東京の現状を見ながら考えていきたい。

1. 分散の効果

都市という存在が排熱に及ぼす影響について、気象庁が「ヒートアイランド監視報告（平成 16 年夏季・関東地方）」で興味深い分析をしているので、本論に入る前にそれを紹介しておきたい。

同報告では、土地利用形態の変化がヒートアイランドに及ぼす影響を都市気候モデルを用いて関東地方について分析している。具体的には、土地利用形態としての「都市」を消去し、かつ人口排熱もゼロにし、土地利用形態を「森林」、「水田」、「草地」の 3 つの категорияに振り分けて温度の変化を見ている。シミュレーションは夏の晴れた無風状態の日を前提にしている。

図 - 1(1) 基準ケース

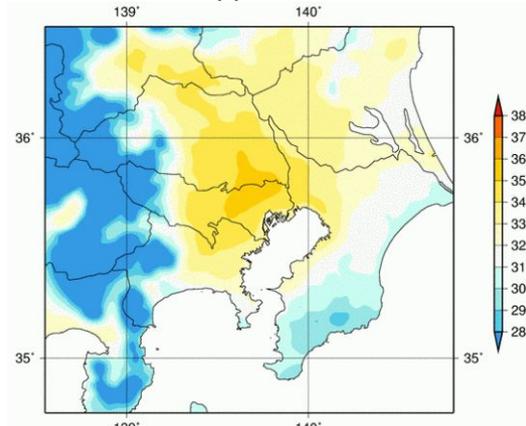


図 - 1(2) 「都市」「人工排熱」除去

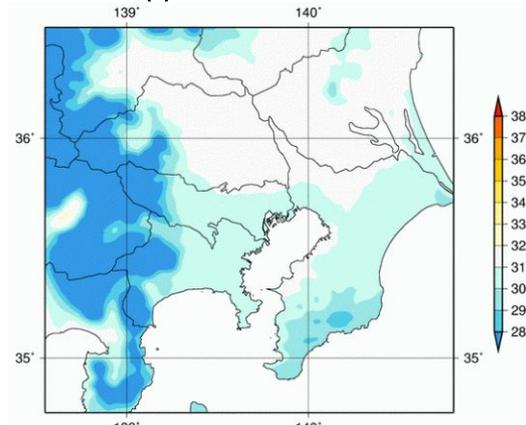
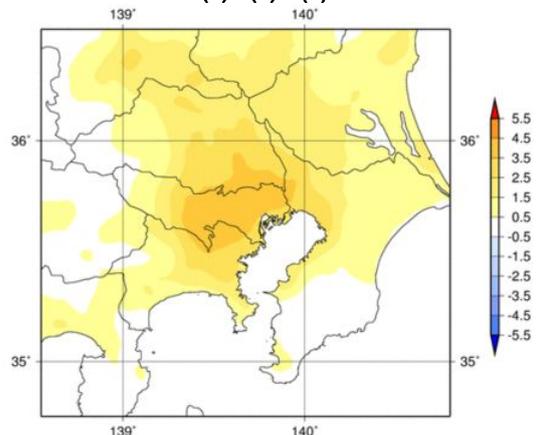


図 - 1(3) (1)と(2)との差



(資料) 気象庁「ヒートアイランド監視報告
（平成 16 年夏季・関東地方）」

図 - 1(1)は基準実験(都市、人工排熱とも有り)における気温分布、同(2)は「都市」と「人工排熱」を除いた実験における気温分布、同(3)は(1)と(2)との気温差を示している。

(1)ではヒートアイランドの広域的形成が見られる。(2)ではヒートアイランド状の高温域は見られない。(3)を見ると、(1)と(2)との差としての温度上昇は関東地方のほぼ全域に及んでいることがわかる。この結果から、同報告では「都市」と「人工排熱」とが関東地方における広域での温度上昇の主原因であると結論付けている。

この実験は極端なケースを想定したものであり、結果も十分予想されるものではあるが、その示唆するところは大きい。都市活動があるところに集中させれば、その悪影響は都市を超えて広域に及ぶのである。したがって、ヒートアイランドを緩和するためにはまずもって人口や経済活動の分散を考慮することが必要である。これは極めて当たり前のことであるが、この当たり前をしっかりと認識することが都市づくりにとって極めて大切である。

2. 集中の現実

(1) ニューヨークに準じて過密な東京

東京都の『東京都市白書'91』には大都市都心部の昼間就業人口を国際比較した図が掲載されている。今となっては少し古い資料であり、既に至るところで引用されてきたものではあるが、他に適当な資料が見あたらないのでここでもそれを引用しておきたい(図 - 2、表 - 1)。

ニューヨーク(CBD)の昼間就業人口が749人/haと際立って高いが、東京(都心3区)は524人/haとそれに次いで高い。ニューヨークの場合、オフィスはマンハッタンの一

部(26k m²)に集中しているので、東京の面積をそれにあわせて千代田区と中央区だけとれば(22k m²)、699人/haとなり、ニューヨークの約9割の密度となっている。東京の場合、ニューヨークに比べて周辺部の昼間就業人口密度も高いので、それを考慮するとむしろ東京の方が高い密度になっているとも考えられる。ロンドンやパリの密度と比較すれば、東京の過密の激しさがわかる。

同白書で用いている東京の人口は1990年の国勢調査によるものであるが、その後の1995年、2000年の国勢調査の結果を表 - 2に掲げた。同表の上段が昼間人口、下段が昼間就業者数であるが、都区部ではどちらも減少しており、特に都心区の減少が大きい。しかしながら人口密度は依然として高く、2000年の都心2区の昼間就業者密度は628人/haとなっている。

(2) 本当はニューヨークより過密な東京

『東京都市白書'91』ではニューヨークのCBDに相当するものとして東京の都心2区を選んでいるが、ここでさらに考慮すべき重要なことがある。ニューヨークのCBDはマンハッタンの南半分を占めているが(図 - 3)、そこには特に大きな公園などなく、ほとんどがビル用地である。少しまとまった緑地があるのは南端のバッテリー・パークや中程にあるニューヨーク大学の敷地のようなものだけで、あとの土地にはビルが建ち並んでいるに違いない(大雑把なイメージではあるが)。ニューヨークは首都ではないのでホワイトハウスも連邦議会議事堂も連邦最高裁判所もない。一方、東京はどうか。

図 - 2(1) 人口密度の国際比較

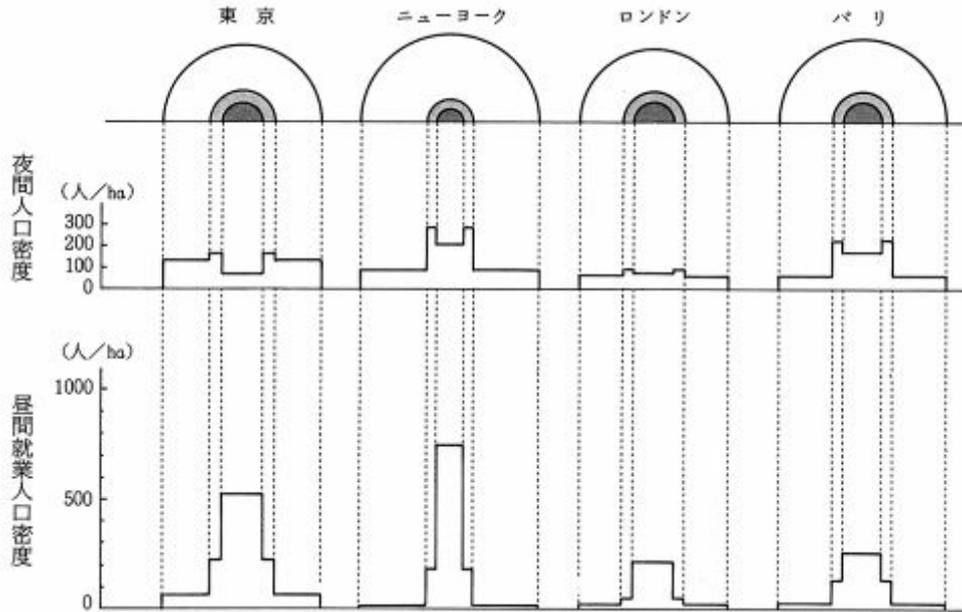
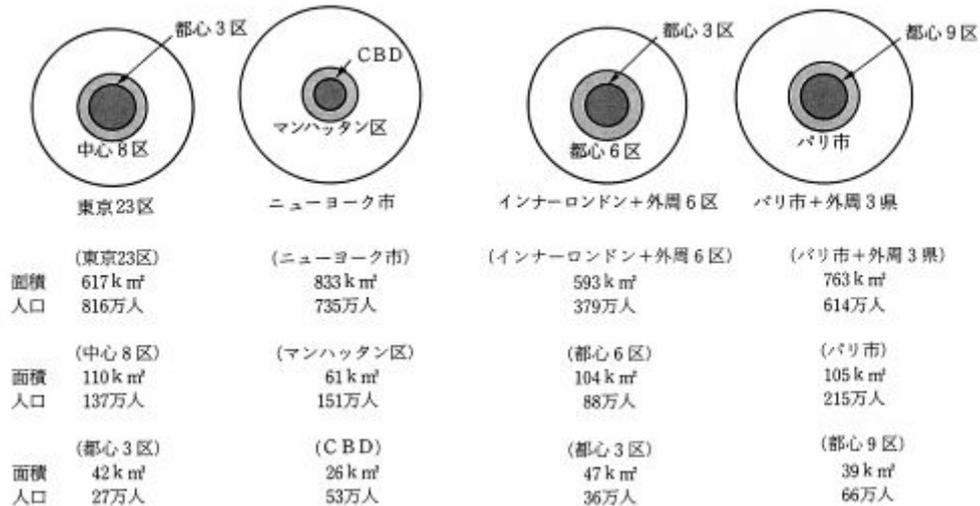


図 - 2(2) 都市の区域の国際比較



(出典) 東京都『東京都市白書'91』

ニューヨークの CBD に相当する地区として『東京都市白書'91』は都心 2 区(千代田区と中央区)を選んでいることは先に述べたとおりであるが、千代田区の土地利用形態はどうなっているか。千代田区は真ん中に皇居を中心とする旧千代田城の地区がある。町丁名は「千代田」「皇居外苑」「北の丸公園」である。この 3 つの地区を合計した面積は千代田区の総面積のちょうど 2 割に達す

る。これを分母に含めて中間人口密度を計算するという事は、一般の人々が昼間は入らないところを入れてしまうのだから、面積を相当水増しして計算することになり、密度は大きく下がってしまうのである。実際、これらの地区を除いて千代田区の昼間人口密度を計算すれば 914 人 / ha という水準になってしまう(表 - 3、なお町丁別には昼間就業者数はわからないので昼間人口を用いた)。

表 - 1 大都市の昼間就業人口密度の国際比較

	面積 (km ²)	人口 (千人)	人口密度 (千人/km ²)	昼間就業人口 (人)	就業人口密度 (千人/km ²)
東 京					
都心3区 (A)	42.01	266.0	6.33	2,201,734	52.41
中心8区 (B)	109.73	1,374.4	12.53	3,701,687	33.73
23区 (C)	617.38	8,163.1	13.22	6,680,985	10.82
内周部 (B-A)	67.72	1,108.4	16.37	1,499,953	22.15
外周部 (C-B)	507.65	6,788.7	13.37	2,979,298	5.87
ニューヨーク					
CBD (A)	26.23	526.0	20.05	1,964,000	74.88
マンハッタン区 (B)	61.39	1,509.9	24.60	2,690,000	43.82
ニューヨーク市 (C)	833.47	7,352.7	8.82	4,162,200	4.99
内周部 (B-A)	35.16	983.9	27.98	726,000	20.65
外周部 (C-B)	772.08	5,842.8	7.57	1,472,200	1.91
ロンドン					
都心3区 (A)	46.81	361.4	7.72	981,988	20.98
都心6区 (B)	103.74	881.3	8.50	1,302,941	12.56
インターロンドン+外周6区 (C)	593.20	3,788.6	6.39	2,444,308	4.12
内周部 (B-A)	56.93	519.9	9.13	321,053	5.64
外周部 (C-B)	489.46	2,907.3	5.94	1,141,367	2.33
パ リ					
都心9区 (A)	39.07	656.2	16.80	986,000	25.24
パリ市 (B)	105.35	2,146.0	20.37	1,808,000	17.16
パリ市+外周3県 (C)	762.79	6,136.5	8.04	3,440,000	4.51
内周部 (B-A)	66.28	1,489.8	22.48	822,000	12.40
外周部 (C-B)	657.44	3,990.5	6.07	1,632,000	2.48

(出典) 図 - 2 に同じ

表 - 2 によれば昼間就業者数は昼間人口のおおむね 90%であるので、昼間人口密度 830 人/ha(ニューヨーク(CBD)の昼間就業人口密度 749 人/ha を 0.9 で除した値)を東京がニューヨーク並みの昼間就業人口密度

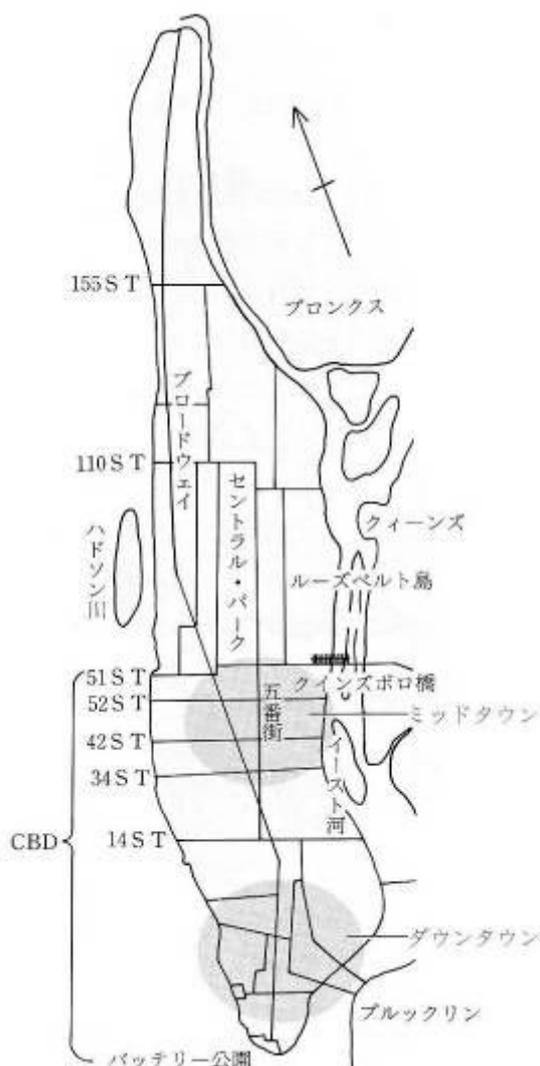
になる値とみなせば、上記計算で既にその値を大きく上回っている。国会議事堂や議院会館等がある永田町及び最高裁判所がある隼町も除くと、昼間人口密度は 973 人/ha にまで高まる。

表 - 2 都区部の別昼間人口及び昼間就業者(1995年、2000年)

地域	面積 (km ²)	1995年昼間人口		2000年昼間人口		増加率 (%)
		(人)	密度 (人/km ²)	(人)	密度 (人/km ²)	
東京都総数	2,186.9	14,571,809	6,663	14,666,899	6,707	0.7
区部	621.3	11,191,345	18,013	11,125,135	17,906	-0.6
千代田区	11.6	949,900	81,607	855,172	73,468	-10.0
中央区	10.2	700,865	69,051	648,366	63,878	-7.5
都心2区計	21.8	1,650,765	75,758	1,503,538	69,001	-8.9
港区	20.3	849,786	41,779	837,658	41,183	-1.4
都心3区計	63.9	4,151,316	64,945	3,844,734	60,149	-7.4
新宿区	18.2	806,095	44,218	798,611	43,808	-0.9
文京区	11.3	345,087	30,512	342,603	30,292	-0.7
台東区	10.1	342,681	33,996	317,700	31,518	-7.3
墨田区	13.8	270,261	19,655	257,972	18,762	-4.5
江東区	39.4	438,253	11,112	454,680	11,528	3.7
品川区	22.7	462,609	20,361	478,529	21,062	3.4
目黒区	14.7	269,947	18,364	267,322	18,185	-1.0
大田区	59.5	647,545	10,890	655,573	11,025	1.2
世田谷区	58.1	688,081	11,847	706,522	12,165	2.7
渋谷区	15.1	536,851	35,530	549,715	36,381	2.4
中野区	15.6	261,174	16,753	272,250	17,463	4.2
杉並区	34.0	411,526	12,097	427,162	12,556	3.8
豊島区	13.0	424,002	32,590	408,802	31,422	-3.6
北区	20.6	318,682	15,478	308,653	14,990	-3.1
荒川区	10.2	175,354	17,192	176,358	17,290	0.6
板橋区	32.2	461,963	14,360	470,917	14,638	1.9
練馬区	48.2	476,777	9,900	507,286	10,533	6.4
足立区	53.2	530,895	9,979	535,321	10,062	0.8
葛飾区	34.8	347,157	9,979	345,365	9,927	-0.5
江戸川区	49.8	475,854	9,563	502,598	10,100	5.6
地域	面積 (km ²)	1995年昼間就業者		2000年昼間就業者		増加率 (%)
		(人)	密度 (人/km ²)	(人)	密度 (人/km ²)	
東京都総数	2,186.9	8,769,087	4,010	8,507,195	3,890	-3.0
区部	621.3	7,267,930	11,698	6,993,133	11,256	-3.8
千代田区	11.6	822,128	70,630	753,645	64,746	-8.3
中央区	10.2	671,133	66,121	613,987	60,491	-8.5
都心2区計	21.8	1,493,261	68,530	1,367,632	62,764	-8.4
港区	20.3	749,073	36,828	724,787	35,634	-3.2
都心3区計	63.9	3,735,595	58,442	3,460,051	54,131	-7.4
新宿区	18.2	592,771	32,516	580,646	31,851	-2.0
文京区	11.3	205,221	18,145	207,284	18,327	1.0
台東区	10.1	271,386	26,923	240,552	23,864	-11.4
墨田区	13.8	178,036	12,948	164,260	11,946	-7.7
江東区	39.4	294,908	7,477	298,319	7,564	1.2
品川区	22.7	315,133	13,870	328,059	14,439	4.1
目黒区	14.7	154,090	10,482	148,297	10,088	-3.8
大田区	59.5	390,776	6,572	372,098	6,258	-4.8
世田谷区	58.1	290,997	5,010	292,388	5,034	0.5
渋谷区	15.1	395,031	26,144	405,318	26,824	2.6
中野区	15.6	122,265	7,843	140,148	8,990	14.6
杉並区	34.0	183,555	5,396	176,899	5,200	-3.6
豊島区	13.0	264,523	20,332	249,717	19,194	-5.6
北区	20.6	153,450	7,453	147,757	7,176	-3.7
荒川区	10.2	104,291	10,225	96,277	9,439	-7.7
板橋区	32.2	236,494	7,351	222,106	6,904	-6.1
練馬区	48.2	202,190	4,198	199,352	4,139	-1.4
足立区	53.2	268,206	5,041	251,813	4,733	-6.1
葛飾区	34.8	171,568	4,932	158,433	4,554	-7.7
江戸川区	49.8	230,705	4,636	220,991	4,441	-4.2

(資料) 国勢調査

図 - 3 ニューヨーク CBD の位置



(出典) 図 - 2 に同じ

表 - 3 千代田区の調整昼間人口密度

	昼間人口 (人)	面積 (km ²)	密度 (人/km ²)
千代田区計	855,172	11.64	73,468
千代田	1,391	1.42	980
皇居外苑	66	0.47	140
北の丸公園	983	0.42	2,340
～ を除いた場合	852,732	9.33	91,397
永田町1丁目	6,381	0.34	18,768
永田町2丁目	15,600	0.34	45,882
隼町	1,407	0.12	11,725
更に ～ を除いた場合	829,344	8.53	97,227
日比谷公園	1,473	0.20	7,365
九段北3丁目	2,485	0.10	24,850
更に ～ を除いた場合	825,386	8.23	100,290

(資料) 2000 年国勢調査

表 - 4 中央区の調整昼間人口密度

	昼間人口 (人)	面積 (km ²)	昼間人口密度 (人/km ²)
中央区計	648,366	10.15	63,878
浜離宮庭園	36	0.28	129
晴海1丁目	14,493	0.30	48,310
晴海2丁目	615	0.20	3,075
晴海3丁目	1,496	0.14	10,686
晴海4丁目	572	0.12	4,767
晴海5丁目	177	0.42	421
佃1丁目	1,842	0.07	26,314
佃2丁目	4,903	0.33	14,858
佃3丁目	735	0.10	7,350
月島1丁目	3,123	0.13	24,023
月島2丁目	1,421	0.09	15,789
月島3丁目	2,474	0.17	14,553
月島4丁目	2,671	0.13	20,546
勝どき1丁目	3,169	0.12	26,408
勝どき2丁目	1,851	0.09	20,567
勝どき3丁目	2,363	0.12	19,692
勝どき4丁目	1,521	0.09	16,900
勝どき5丁目	1,484	0.15	9,893
勝どき6丁目	2,312	0.10	23,120
豊海町	1,470	0.16	9,188
湊1丁目	2,294	0.06	38,233
湊2丁目	1,168	0.06	19,467
湊3丁目	2,048	0.07	29,257
築地6丁目	5,851	0.17	34,418
築地7丁目	4,623	0.12	38,525
明石町	10,843	0.25	43,372
上記を除いた場合	572,811	6.11	93,750

(資料) 2000 年国勢調査

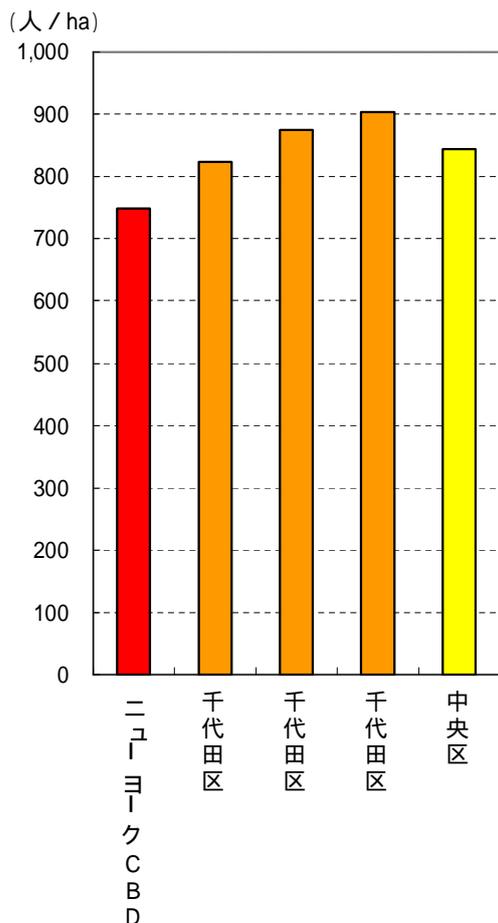
さらに大きな公園と神社がある日比谷公園と九段北3丁目を除くと、昼間人口密度は1,002 人 / ha と大台を超えてしまう。

中央区についても同様の計算をしてみた。中央区には明治以降の埋立てで出来た土地が相当あるので、それら(中央区総面積の4割)を仮に除いて通常イメージされる都心について昼間人口密度を試算した(表 - 4)。するとその部分の中央区の昼間人口密度は938 人 / ha となり、やはりニューヨークの水準を遥かに上回ってしまう。

以上の計算結果を、ニューヨーク CBD の昼間就業人口密度を比較したのが図 - 4 である(ここでは表 - 3、表 - 4 の数値に 0.9 を乗じて昼間就業人口の概念に合わせている)。千代田区、中央区ともにニューヨーク

CBD の水準を大きく上回っており、高温多湿の東京でこのような土地利用になってしまったことは尋常ならざる事態であると言わざるを得ない。

図 - 4 昼間就業人口密度比較
(ニューヨーク CBD と東京都心 2 区)



(注) 千代田区 ~ は表 - 3 の数値に、中央区は表 - 4 の数値に、それぞれ 0.9 を乗じたものである。

以上はおおまかな比較である。より精確な比較を行なうためにはニューヨーク CBD の中をきめ細かく見ていく必要がある。もっとも千代田区、中央区の中には中低層の地区が広く存在しているので、精確な比較を行なえば東京の業務集積地区はさらにニューヨ

ークよりも高密になっているという結果が出るように思われる。

(3) 昼間人口過密町丁の分布

図 - 5 は都心 3 区について昼間人口密度が高い町丁の分布を示したものである。ニューヨーク CBD の昼間就業者密度の水準に相当する東京都心の昼間人口密度を 830 人/ha とし、それ以上の密度を持つ町丁を 3 ランクに分けて表示した。

密度が高い町丁は皇居の南西から反時計回りに、赤坂 虎ノ門 新橋 銀座 京橋 日本橋 神田 飯田橋、及びその内側にある霞が関 丸の内 大手町のように分布している。また、新橋からは南の方向へ芝 三田と密度が高い町丁が伸びている。

これらの地区が既にニューヨーク CBD の密度を超えてしまっているということは、ここが大きな熱源になっているということを意味する。したがって、都市環境の改善を図るためにはこれらの地区から経済活動を分散させることが必要になる。これは中長期的な課題ではあるものの現下の都市環境の厳しさを考えると時間的余裕はないであろう。

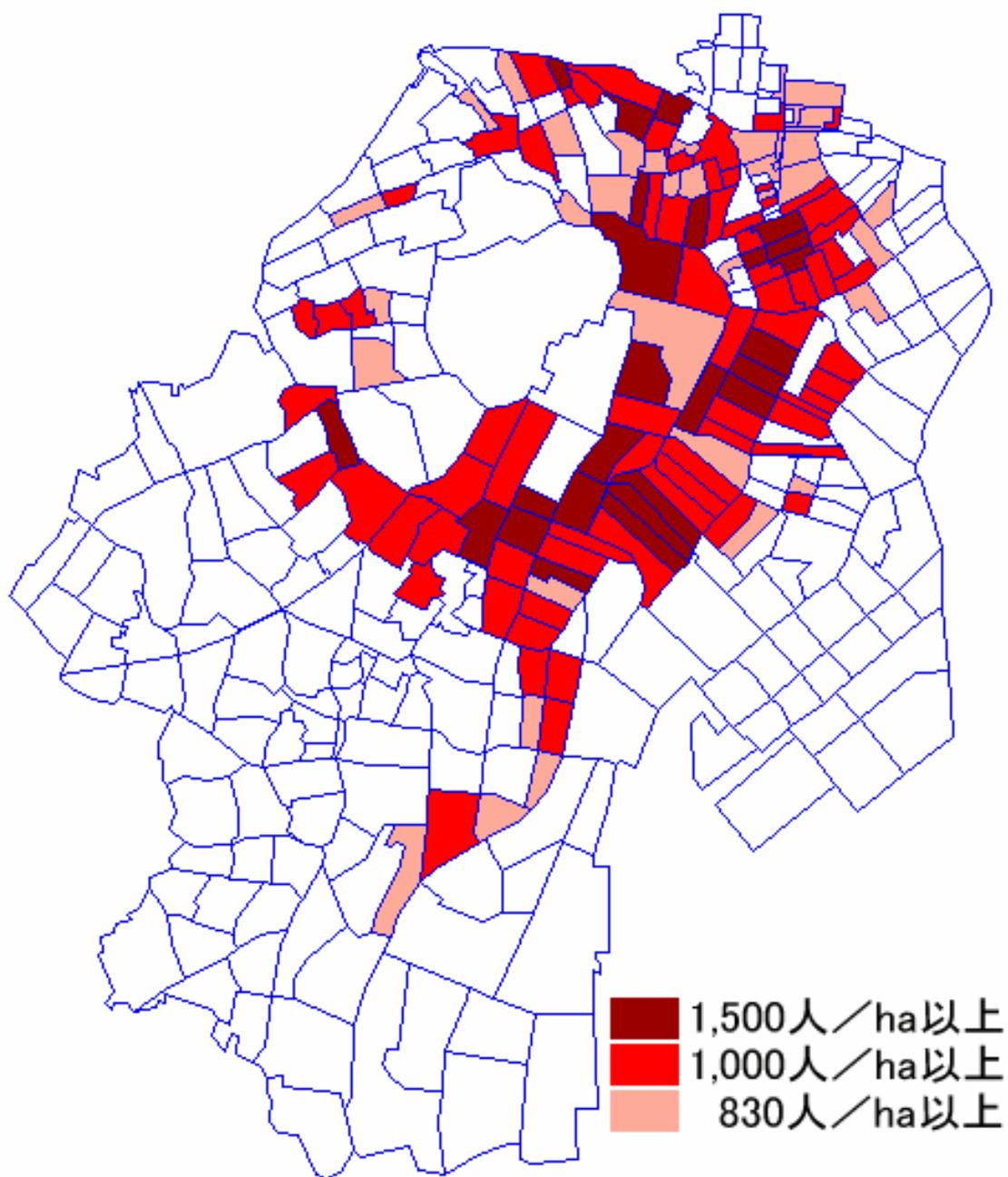
短期的な課題としては、とりえずこれらの地区で排熱を抑制する、あるいは冷却する応急措置が必要である。例えば、窓が開かない建築の禁止、公開空地の緑化義務付け、冷暖房効率の向上、自動車流入の抑制、既存高層建築物の間引き、打ち水の奨励、在宅勤務やシエスタの奨励、イベントやマラソンの禁止等、効果が大きそうなものから小さそうなものまでいろいろな方法がある。

特に重要と思われるのは、図 - 5 の密度が高い町丁の周辺における高層建築を抑制し、あるいは既存高層建築を取り壊し、熱を

外に逃がすことである。もしこれらの地区を高い建物で囲ってしまえば、火鉢の底で火を焚いているような状態になり、温度はますます

上昇してしまう。都心が人口盆地になってしまう。ところが現実には実に恐るべきことにその逆の事態が進行している。

図 - 5 昼間人口過密町丁の分布(千代田区・中央区・港区)



(資料) 2000年国勢調査

3. 超高層ビルの分布

図 - 6(1)は、超高層ビル(高さ 99m以上)の分布を見たものである。図中の丸いピン(WEB 版では赤いピン)は既存の超高層ビルの位置を、瓢箪型のピン(同黒いピン)は建築中の超高層ビルの位置を示している。

既存の超高層ビルは都心、副都心に集中しているが、建築中の超高層ビルは、都心に特に集中している。また、都心から湾岸に沿って南下している。また、東京湾の埋立地でも建築が進んでいる。これは海風が都市に入ることを妨げるような形であり、極めて憂慮すべき事態である。

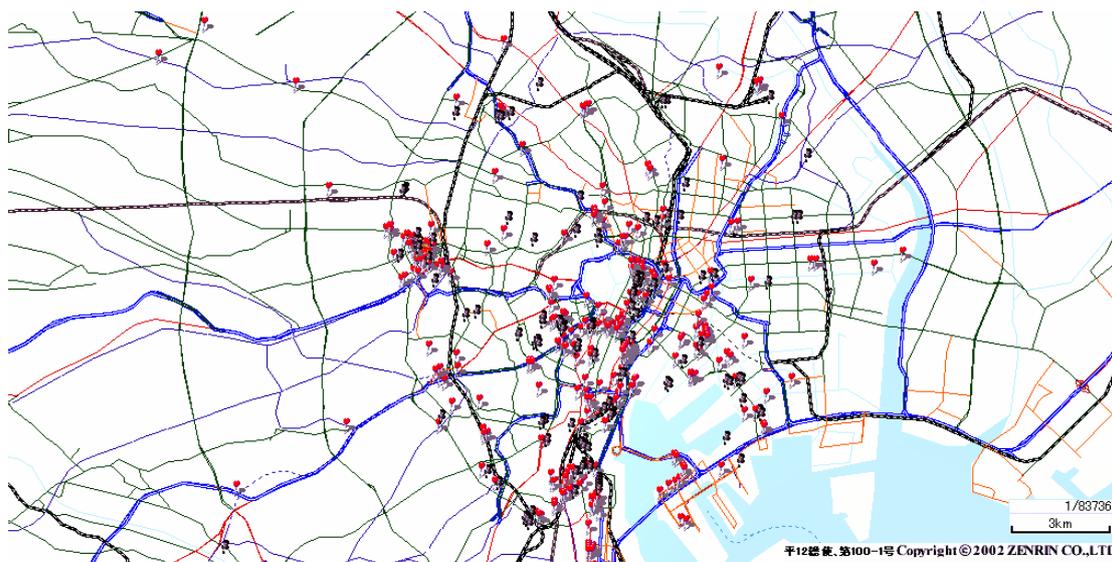
同図の都心部を拡大したのが図 - 6(2)である。これを図 - 5 と重ねてみると、超高層ビルが昼間人口高密度地区の周辺部あるいはその外側に建っていることがわかる。また、別稿「ハードボイルド・ワンダーシティ」に掲げた東京都心の地表面温度分布図(図 - 7(2))と重ねてみると、超高層ビルは高温域

を取り囲むように建っていることがわかる。

高温域は新橋から南の方向へ伸びる傾向があるが、建設中の超高層ビルの分布を見るとそれと連動しているようにも見える。超高層ビルは既に新橋、芝周辺と品川周辺に建っているが、現在建築中の超高層ビルはその間を埋めるように分布している。この傾向が続いて将来湾岸に長大な壁ができあがると東京湾からの風がますます遮られ、高温域の環境はさらに悪化していくことが考えられる。

一方、丸の内や赤坂などでも超高層ビルがさらに建設されつつあるが、これらが高温域を取り囲む内陸側の壁を完成させていくことになると、いよいよ高温域は海側、皇居側の両方の長大な壁にサンドイッチされることになり、暑熱回廊と化していく危険性がある。それにしても東京はそこまでして高い建物を建て続けなければならない状況にあるのだろうか。

図 - 6(1) 超高層建築物(高さ 99m以上)の分布



(注) 超高層ビルの情報は <http://www.eonet.ne.jp/~building-pc/tokyo/to.htm> による。

図 - 6(2) 同都心拡大図(赤い(丸い)ピンは既存の、黒い(瓢箪型の)ピンは建設中の建築物)



4. 東京の昼間人口及び就業者数の予測

国勢調査を元にした東京都の人口予測では、東京都の今後の昼間人口及び夜間人口は図 - 7 のように推移する見込みである。

東京都全体の昼間人口は平成 12(2000)年から平成 17(2005)年までに 1.9%増加し、さらに平成 22(2010)年までに 0.2%増加するが、平成 27(2015)年には減少に転じ、平成 32(2020)年には 12(2000)年比で 0.6%減少する見込みである。

区部の昼間人口は平成 2(1990)年をピークに平成 12(2000)年まで減少してきたが、平成 17(2005)年に一旦増加(1.3%増、常住人口増による)した後、平成 22(2010)年には再び減少(0.3%減)に転じ、平成 27(2015)年 1.8%減、平成 32(2020)年 2.1%減と減少のテンポを速めることになる。平成 32(2020)年の昼間人口は 12(2000)年比で 2.9%減の見込みである。

一方、就業者数に関しては東京都全体(これはグラフには示していない)では、平成 22(2010)年以降平成 32(2020)年まで一貫して減少を続け、平成 32(2020)年の就業者数は平成 12(2000)年比で 4.9%減となる見込みである。

区部の就業者数の見込みは図 - 8 のようになっている。ピークは平成 7(1995)年であったが、その後一貫して減少を続け、平成 32(2020)年には平成 12(2000)年比で 7.3%減と大幅な減少になる見込みである。特に男性の減少が著しく、平成 32(2020)年には平成 12(2000)年比で 12.8%減(57.6 万人の減)となる見込みである。

以上のように、今後東京では昼間人口、就業者数ともに減少していく見込みであり、

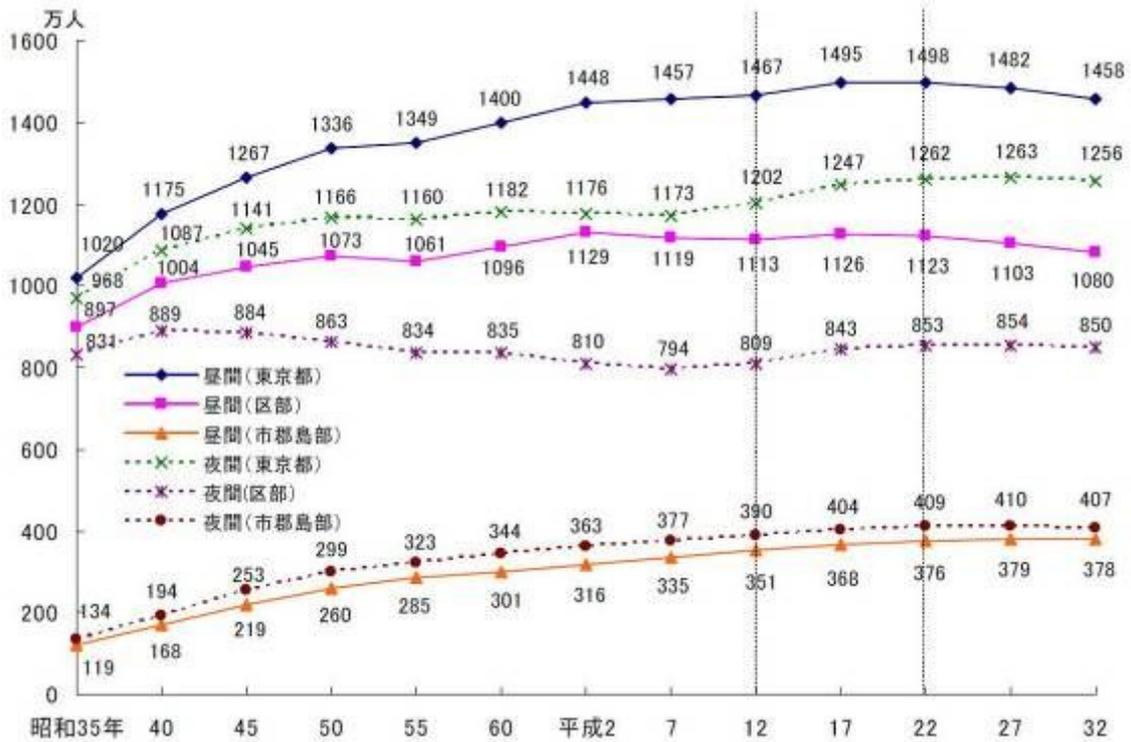
特に区部の減少が著しくなる見込みであるが、この減少傾向は都心区ではさらに激しいものになる。

表 - 5 及び図 - 9 は、都心 3 区の昼間人口予測値を 2000 年を 100 として示したものであるが、いずれの区も大きく減少する見込みである。2020 年には 2000 年に比し千代田区、港区は約 1 割も減少し、中央区は約 2 割も減少することになる。千代田区は 2000 年以降ほぼ同じペースで減少を続けるが、中央区、港区は 2010 年以降急激に減少する。2010 年から 2020 年の 10 年間で中央区は 16%の減少、港区は 9%の減少となる。たった 10 年間でこれだけ減少するというのは実に驚異的である。

表 - 6 及び図 - 10 は、都心 3 区の数就業者数予測値を 2000 年を 100 として示したものであるが、いずれの区も昼間人口同様大きく減少する見込みである。2020 年には 2000 年に比し千代田区、港区は約 1 割減少し、中央区は約 2 割減少することになる。中央区、港区はやはり 2010 年以降の減少が激しく、同年から 2020 年までの間に中央区は 17%の減少、港区は 9%の減少となる。

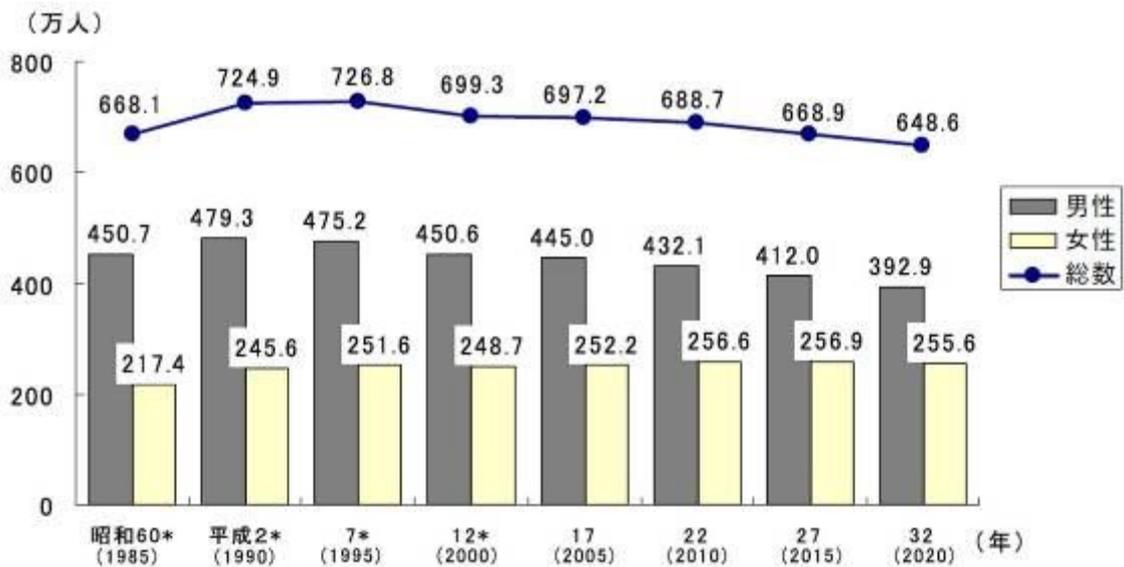
都心の昼間人口、就業者数がこれから大きく減少していくことを考えると、超高層ビルが次々と建て続けるのは資源の明らかな壮大な浪費ではないかと思われる。仮に、減少傾向にある昼間人口を超高層ビルの建設で都心に呼び戻すなどということにでもなれば、それは都市環境の面でまったく好ましくないことである。都心部では超を外した高層化、あるいは中層化、あるいは中低層化をこれからの都市づくりのあるべき方向として考えてみることも必要なのではなからうか。

図 - 7 東京都、区部及び市郡島部の昼・夜間人口の推移と予測



(出典)東京都「東京都昼間人口の予測」2003年12月

図 - 8 従業地による男女・地域別就業者数の推移と予測(区部)



(出典)東京都「東京都就業者数の予測」2005年3月

表 - 5 都心3区の昼間人口予測
(2000年=100とする指数)

	2000	2005	2010	2015	2020
東京都	100.0	101.9	102.2	101.0	99.4
区部	100.0	101.3	100.9	99.1	97.1
千代田区	100.0	98.1	95.8	93.4	91.3
中央区	100.0	99.5	97.0	89.2	81.6
港区	100.0	100.9	100.0	95.5	91.2

(資料)「東京都昼間人口の予測」2003年12月

図 - 9 都心3区の昼間人口予測

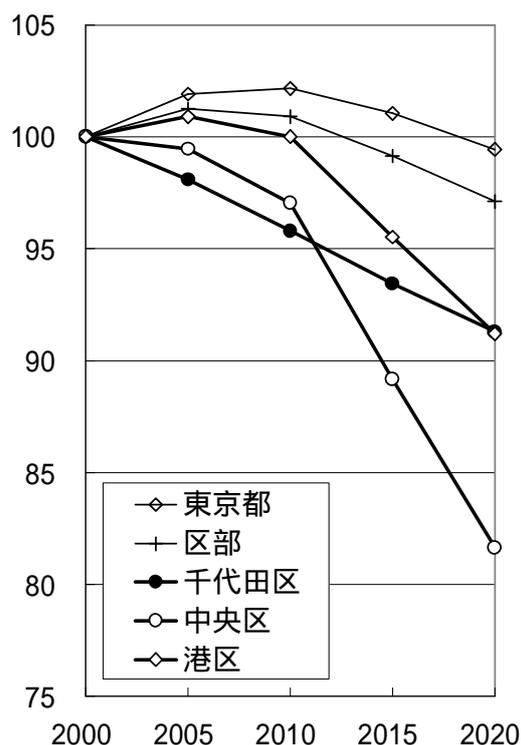
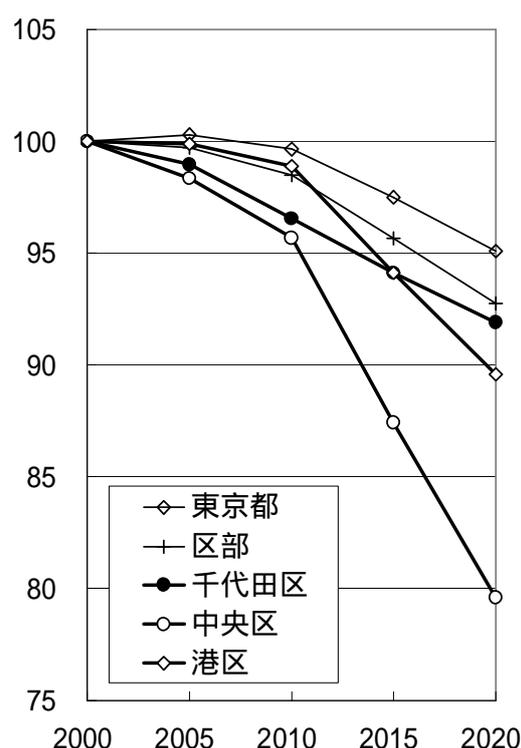


表 - 6 都心3区の就業者数予測
(2000年=100とする指数)

	2000	2005	2010	2015	2020
東京都	100.0	100.3	99.6	97.5	95.1
区部	100.0	99.7	98.5	95.6	92.7
千代田区	100.0	99.0	96.5	94.1	91.9
中央区	100.0	98.3	95.7	87.4	79.6
港区	100.0	99.9	98.9	94.1	89.6

(出典)「東京都就業者数の予測」2005年3月

図 - 10 都心3区の就業者数予測



5. かがやける都市

(1) 「近代的都市計画」の反省

以上のような東京の「近代的都市計画」はル・コルビュジェの「輝ける都市」の延長上にあるものだ、という考えは、例えば東京駅丸の内広場側の計画図などを見ると少しそのような感じもするので、あながち否定もできないが、どうも本質的な点を見落としているような気がする。何故かと言うと、「近代的都市計画」の反省として出てきた議論の中には相変わらずモノづくりを中心に置いているものが多いように感じるからである。「近代的都市

計画」の反省とはモノから人へ、モノから自然へと視点を移すことではないかと思うのであるが、その観点からするならば議論の中心はコミュニティ形成や自然再生になるはずなのである。

コンパクト・シティの議論の中には相変わらずモノの議論が中心になっているものがあるように感じる(アメリカのニュー・アーバニズムなどもそのような性格が強いであろう)。ひどい議論になると東京の都心にさらに機能を集中させるのもコンパクト・シティだなどというものもあるらしいので、そこに「近代的都市計

画」の反省を感じることは難しい。東京の都心にこれ以上機能を集中させる形態はともコンパクト・シティとは言えず、強いて言えばそれはコンパクト・シティ(完全すし詰め都市)である。

都市を見る視点が、生身の人間が都市を感じる視点ではなく、相変わらず目に見えるモノをいかにつくるかという計画者の俯瞰的な視点であっては、「歩いて暮らせる街づくり」も単純に歩行距離で測って考えてしまう。それで東京の都心にもっと詰め込めばコンパクトで歩いて暮らせる街ができるだろうなどと変な議論にもなってしまう。もちろんそれで出来るのは歩いて暮らせる街ではなく歩いてくらす街である。

物理的に距離が近ければ歩いて暮らせるなどということはない。いくら距離が近くても例えば機銃掃射されるような空間を平気で歩ける人はいない。歩いてくらす街も基本的にはこれと同じである。何でもコンパクトにすればよいと万が一にでも思ったら大間違いである。歩けるかどうかは人間の五感で判断しなければならない。つまり本当に歩けるためには、そこに人間を害しないコミュニティと自然環境とが必要である。「近代的都市計画」を反省する視点からは自ずとこれらを都市づくりの中心に置く考えが出てくるはずである。

(2) 輝ける都市

超高層ビルを建て並べて都市を上を伸ばし横の距離を縮めるなどという都市は、コンパクト・シティとは似てもいらない非なるものである。それどころかル・コルビュジェが提唱した「輝ける都市」と比べても思想的に遥かに劣る(革新的な思想がない)。「輝ける都市」

を支点にして考えるならば、そのような都市はコンパクト・シティの反対側に位置するものである。

「輝ける都市」とは高速交通手段で結ばれた高層建築を広大なオープン・スペースの中に配置して光と緑溢れる健康的な都市環境を実現するというものであり、当時の伝統的な都市観の下では革新的な思想を持つものであった。しかし、その考えを支持する人は既に少なく、今の有力な考え方は、人間の活動を一定以上の密度で平面的に広げることが健全な都市をつくるというものである。高層よりも中低層というのが時代の流れである。本来のコンパクト・シティにもこの考えが強く反映されている。「輝ける都市」を批判的に見る立場で、宇沢弘文は次のように述べている。

20世紀の都市は、近代的都市計画の理念にもとづいてつくられてきた。この近代的都市計画の理念は、イギリスのエベネザー・ハウードの「田園都市」に始まり、アメリカに渡って、パトリック・ゲッデスによって拡張され、広域都市の考え方に受け継がれていったが、その昇華点は、ル・コルビュジェによる「輝ける都市」の理念であった。ル・コルビュジェの「輝ける都市」は、20世紀の都市の形成、再開発のプロセスに決定的な影響を与えた。

ル・コルビュジェの「輝ける都市」は、都市を一つの芸術作品とみなし、合理的精神にもとづいて、最大限に機能化された幾何学的、抽象的な美しさをもつ。それは、高度に発達した20世紀の工業技術と抽象派の芸術とを都市の形に結晶し、具現化したものである。これを象徴するのは、ガラス、鉄筋コンクリートを大量に使った高層建築と近代的なデザインをもつ自

動車であった。それは、20世紀の企業資本主義にたくみに適合していた。しかし、ル・コルビュジェの「輝ける都市」は抽象派の芸術作品としてはすぐれた作品かもしれないが、人間が生活して、人間的交流をもち、人間的な文化を形成してゆく場ではない。

(宇沢弘文・国則守生・内山勝久編

『21世紀の都市を考える』

東京大学出版会、2003年)

「近代的都市計画」の「昇華点」が「輝ける都市」であったというのはおそらくその通りであって、それが「近代的都市計画」の成果でもあり限界でもあったと見るべきであろうし、「近代的都市計画」によってできる空間は「人間が生活して、人間的交流をもち、人間的な文化を形成してゆく場ではない」というのもおそらくその通りであって、それが今日の都市問題の根本原因であるということも多くの識者が指摘するとおりであるが、それは「輝ける都市」の根本的な価値を否定するものではない。

むしろ、見方によっては、新しい都市形成の方向は「輝ける都市」の延長上にあると言うことも可能である。もちろんこれは「近代的都市計画」を支持するものではなく、むしろそれを解消することによって可能になるわけであるが、ただしここで言う「近代」とは現実に広がってしまった「近代」であって、それはル・コルビュジェの言う「近代」とは本質部分で全く別物であるように思われる。

ということで、ここで少し「輝ける都市」の意義について触れておきたい。ル・コルビュジェが「住宅は住む機械である」と言ったことは有名で、「輝ける都市」はその考えを都市に当てはめたものであるということも都市関係

者なら知らぬ者はないほど有名であるが、問題はその「機械」である。

ル・コルビュジェが用いる「機械」のイメージは、日本人が持つイメージとはかなり異なるように思われる。日本人が「機械」で思い浮かべるのは「反自然的で非人間的な人工物」というものであろうが、自然ですら規則正しく生育する西洋で生まれ育ったル・コルビュジェにとっては、自然ですら「機械」のようなものであり、あるいは「機械」ですら自然のようなものである。それは非人間的なものではなく、人間のために機能するものである。あるいは人間を優しく包み込むものである、と断定するわけにもいかないが、例えば富永譲の次のような指摘を踏まえるとそのように推察できる。

あるところでル・コルビュジェは、住宅は幸福を生む場所であるとも述べている。住宅が機械めいているのではなく、住まいが<地上の楽園>であるように、人間にとって運転される空間の機械。さまざまな異なった性質の空間の集合体。屋上庭園やピロティといった近代建築の五原則も、ドミノの架構の床面の上に異なった性質の空間を付着させてゆく手法であったのだと思われる。地上の楽園は、この小さな箱の中に心をこめて、もっとも密度高く構成されたように見える。この住宅が最小限の宮殿として、幸福を生む場所になるのは、保護されたなかでそうした空間の多様性を味わうことができるからに違いない。(中略)

シトロアン住宅を例にあげ、それが<住むための機械>であるという時も、住宅をひとつの建築的構成と見立て、そこに形態要素の複合としての純粋な関係性の表出を読み取ろうとする。その構成はそれを手段とするならひとつ

の緊密な功利的道具のようにもみえるだろう。しかし住宅のように内部の空間の構成そのものが目的とされるとき、住むための機械は関係自体の明晰な表現をとることになる。

(富永譲『ル・コルビュジェ 建築の詩』

鹿島出版会、2003年)

例えば日本では「里山」は「自然」で「機械」は「人工」という相反するイメージがあるが、「里山」は人間が自分たちの都合にあわせて手を入れた「自然」であるから、それとル・コルビュジェの言う「機械」との間には、西洋人の視点からするならば、日本人ほどには相反する距離はないように思われる。「里山都市」などと言うと水と油とをくっつけたような印象を受けるかもしれないが(なにしろ「周囲の自然を守るためにも都市は超高層化してコンパクトにするべきだ」などという変な議論もあるくらいなので)、それも日本の「機械」的な見方によるものであろう。

ル・コルビュジェの「機械」を上のように解釈すると、その「機械」として設計した「輝ける都市」の本質は、「高度に発達した 20 世紀の工業技術と抽象派の芸術とを都市の形に結晶し、具現化したもの」という表現自体は誤りではないかもしれないものの、その表現が持つ冷たいイメージの中にはない。ル・コルビュジェが描いたキュビズムの絵画を「輝ける都市」に重ねることも可能かもしれないが、むしろロンシャンの礼拝堂等後年の作品に連なる精神こそが「輝ける都市」を構想した原動力であったと解釈する方が事実に近いのではないかとも思われる。

「輝ける都市」のユニバーサルな「近代」の形と土地特有のパナキユラーな形とは一見相反するもののように見える。それは帝国対

土着民族の構図に見えないこともない。対地域主義(閉鎖的な)という観点からはそのような対比も可能であろう。しかし、より重要なことは、形の一般性よりも人間を見る精神の向きにある。

帝国の本質を「皇帝が人間を引っ括る体制」と考えるならば、それは上位に存在するものの都合に合わせて人間を型にはめる体制である。標準化、規格化をその特質とする「近代」もそれと似た性質を持っている。「進歩」「発展」などという根拠不明な上位の概念のために人間を動員するという体質を「近代」は持っている。もっとも人間にとって最も大切な概念は往々にして根拠不明なものである(例えば愛、美、共創など)、それだけで概念を否定することはできないが、問題なのは、「進歩」「発展」のために自分を型にはめる人間が優れた人間であるなどという変な価値観が蔓延することである。そのため「人間のために経済がある」という真っ当な考えがいつの間にか「経済発展のために人間が頑張る」という妙な考えにすりかわる(もちろん内容によっては経済発展の価値自体を否定するものではない)。

ル・コルビュジェの考える「近代」はそれとは本質的に異なる。それはモデュロールを考えればわかる。モデュロールはあくまで人間の身体の尺度が周囲を規定する体系である。地球の大きさから割り出したメートルという尺度(モノの尺度)で作ったものに合わせて人間が生活する方向とは逆方向の規定の仕方である。「輝ける都市」が「近代的都市計画」の「昇華点」であるにしても、そこで言う「近代的」とは今日我々がイメージするものとは相当異なる。その点に関しては八束はじめ『ル・コルビュジェ』に次の記述がある。

「輝く都市」は、22年の「300万人の現代都市」や25年以降のプラン・ヴォアザンを発展させたものである。新しさは基本的に2つの点にある。一つはそれまでのものがビジネス都市にすぎなかったのに対して、「輝く都市」では住宅及び再生産(余暇 グリーンシティの構想と無関係ではない)の機能が重視されたこと、二つには住宅が以前のものではヒエラルキーをもっていたのに対して、「300万人……」の周縁の田園都市の廃止を含めて、すべてが一体化されたことである。労働者は平等な経済的権利をもって都市の中に再統合される。「都市、人間的になる都市とは階級のない都市である。」ル・コルビュジェのこの時代の都市モデルは常に全体性として構想された所が特徴である。第三回CIAMに彼がこの構想をもちこもうとしたのは、その時のテーマ「合理的配置」に対して、具体的にいえばドイツのモダニストたちのジードルンクの手法 あくまで技術的なものを媒介にしてしか計画のイデオロギーを拡げていかない に対しての批判であった。グロピウスのカールスルーエのダメルシュトック・ジードルンクやヒルベルザイマーの「大都市」と題されたモデル計画では規則的な法則に従って同一のユニットが反復されている。それはテクノロジーと計画のイデオロギーのつくり出した冷厳な都市機械の部品である。「輝く都市」はそれに比べれば遥かにロマンティックであり、全体像から居住者の理想像(中略)までに通底するル・コルビュジェ個人のイメージ 客観的な法則というよりも が遍在化している。(中略)「都市計画のみによって社会体系を治癒し得るはずはない。」それは、自らを常に政治性の枠組の外に置いてきたル・コルビュジェにとって不可避的な批判であった。

(中略)

ル・コルビュジェは、しばしば彼の計画する都市の生活者をどのように設定しているのかと、主に左翼の側から問われつつけてきた。それは社会的・政治的な見通しを欠いているという意味で提出された批判でもある。(中略)ル・コルビュジェの間接的な答は度々表明されている。建築家は政治・経済人とは別であるべきだ、という類の発言がそれである。通り一遍に受けとるべきではあるまい。それは自分としては建築家として人間のリアリティをもったイメージをもち得るのだという表明と受けとるべきである、左翼の方こそ人間を、肉体的リアリティをもった存在としてではなく経済の範疇でしか見得ていないと。

(八束はじめ『ル・コルビュジェ』

岩波書店、1983年)

「輝ける都市」は、今日イメージされる「近代的都市計画」とは視点においてかなり異なるものであることがわかる。我々がイメージする「近代的都市計画」とは、むしろ「輝ける都市」が批判した「あくまで技術的なものを媒介にしてしか計画のイデオロギーを拡げていかない」、「規則的な法則に従って同一のユニットが反復されている」、「テクノロジーと計画のイデオロギーのつくり出した冷厳な都市機械」といったものである。「輝ける都市」の視点は人間からモノを見るというものであり、それに近代技術が被せられている。八束前掲書ではル・コルビュジェのアルジェ計画に潜むものを「近代性と土着性との並存の可能性」と表現しているが、通常イメージされる「近代的都市計画」の視点ではそのような計画にならないであろう。

以上の議論は、閉鎖的・こけおどしの・人

間抑圧的な体制を打破するものとして出てきた「近代」がいつのまにか反転して自ら同じようなものになってしまうという事態があるのでわかりにくい面があるが、要するにル・コルビュジェはそのどちらにも対抗したと言える。前者への対抗に関してはロンシャンの礼拝堂がその姿勢をよく表わしているとも言われるが、それに関して佐々木宏『知られざるル・コルビュジェを求めて』には「ロンシャンの聖堂の反面的ルーツ」として次の記述がある。

1994年に『ドイツ紀行』として刊行された遺品の1910年から1911年の『手帖』に注目すべき記述があり、フランクフルトとミュンヘンのカトリック教会での体験が詳細に描写されている。とくにミュンヘンではバロック建築の幻想的な内部空間の異様さに魂を奪われるほど圧倒されて一種の陶醉状態になっている。(中略)激しい造形空間があると聞かされて、この通称アザム教会を訪れた。(中略)この部分は『手帖』のなかで文章表現の白眉的頂点である。

「(中略)赤色と緑色と黄色の球。幻想的な円天井は、ただごまかしの言い逃れによるものである。証明された全体の高さは、過剰に装飾された天蓋や形のゆがんだエンタブラチュアの上。(中略)」

ロンシャンの聖堂の簡素で抽象的な内外の空間構成は、いわくありげで意味深長に見える。おそらくアザム教会での若き日の体験の反動が根底にあって創造されたに違いない。

(佐々木宏

『知られざるル・コルビュジェを求めて』

王国社、2005年)

人間抑圧的なものへの対抗という姿勢は「輝ける都市」においても同様である。「ヴォ

アザン計画」のパスなどからはその本質を感じることは難しいが、それは「白の時代」の箱の形から内部の「プロムナード」を想像することが難しいのと同じではないかとも思われる。「白の時代」の箱ですらその内部の動線は「近代」の「ユニバーサル・スペース」などとは異なる人間性豊かなものであったことを思うと、「輝く都市」の中心にあるのは「芸術作品」を鑑賞する視点ではなく「人間」を見る視点であったはずである。その点は坂倉準三が次のように端的に指摘している。

彼の“輝く都市”は、今世紀の機械文明がもたらした技術革命による成果を基礎とした建築と都市計画との緊密な関係の上につくり出される新しい三次元の都市計画であって、これによって、ながい間混迷の中に苦しんだ都市、農村の人達、あらゆる人間に“物質的にも精神的にも申し分のない最上の生活条件”を見出さしめようとするものである。(中略)ル・コルビュジェの“輝く都市”は彼の畢生の仕事である。彼の不世出の天才のすべての建築活動がこの基礎の上に行っている。

(ル・コルビュジェ『輝く都市』

鹿島出版会、1968年)

坂倉がこう言い切る以上、「輝く都市」は極めて人間味溢れる本当の意味での「芸術作品」であったに違いないのだが、それはル・コルビュジェ自身のさまざまな言葉からも十分にうかがうことができる。以下にその中から一節だけ引用しておきたい。

本書の研究において、既成の観念　　す
でに言い古されたこと　　は一度として問題
にならなかった。その理由はといえば、慣習と

いうものはそうしたものだからである。御用学者の大事にしている観念など、われわれにとっては、せいぜい、いつも予測し得なかった(あるいは故意に眼を塞いでいた結果生じた)混乱をもたらしたに過ぎなかったのである。どのようなものでも、慣習に背くという理由で棄てられるべきではない。諸機能の新しい態勢(それはもしかしたら永続的な本質を持ったものであるかもしれないのだが)に応ずるには、新しい組織が生み出され、発展するようにしなければならない。それに対し要求し得る条件といえば、健全性 健全な解決 ということだけである。だが、ああ、何ということであろう。(良い言い方をすれば)過去に対する愛着だが実際は老朽と不毛に他ならないものが、躊躇なく社会に対する犯罪を企てたのである(思想を殺さんとする犯罪、技術を殺さんとする犯罪、夢と詩を殺さんとする犯罪などを…)。その犠牲者となるのは、近代の時の流れに押されて目覚めたまま、自分達の習慣の中に籠っている飽食暖衣の人々ではない。犠牲者となるのは、貧しいつましやかな人々なのである。唾棄すべき利己主義と、利益のみを追求する貪欲とが人々を駆り立てて騒然たる世情を醸し出し、そういう情勢がまた、一種特別な文学を書き飛ばすところの<吟遊詩人>達を養うことにもなった。この<吟遊詩人>達とは、毎日の新聞、雑誌の仕事に細々としがみつき、筆商売の人間でありながら、その雑文の材料となる事がらを何も知らず、またその現実の姿については、何ら調べようとも知りたいとも思わず、ただ一つの見方を後生大事に守って、それを、日々の飯の種とするような連中なのである。

(ル・コルビュジェ『輝く都市』坂倉準三訳、鹿島出版会、1968年)

この文章を今日に当てはめてみても十分味わい深いものになるであろう。ところで、宇沢弘文は先に引用した箇所が続けて次のように記している。

それに反して、社会的共通資本としての都市というとき、都市は居住する数多くの人々の生活の場であり、また人々が働き、生計を立てるために必要な所得を得る場でもあり、訪れる人々をも含めて、多くの人々がお互いに密接な関係をもつことによって、文化の創造、維持をはかってゆく場でもある。

かつて私たちは「最適都市」という概念を提起した。最適都市は、いわゆる近代的都市の理念を超えて、都市の中で生き、生活を営む市民の視点からみて、どのような構造をもち、どのような制度をもった都市が望ましいのかということを探るために導入されたものである。限られた地域のなかに、技術的、風土的、社会的、経済的諸制約条件のもとで、どのような都市的インフラストラクチャーを配置し、どのようなルールないしは制度によってそれらを運営したら、そこに住む人々にとって人間的、文化的、社会的な観点からもっとも望ましい生活を営むことが可能であろうかということを探るのが最適都市の考え方である。社会的共通資本としての都市の考え方は、最適都市の考え方をさらに発展させて、社会的、文化的、自然的な観点から魅力のある都市をつくるための制度的諸条件を明らかにしようとするものである。

ここで強調されているのは「社会的関係性」である。その視点で眺めた都市が「社会的共通資本としての都市」である。ル・コルビ

ュジェの時代は「人間の個としての健康」を確保することが大きな課題であったため、それを解決する有効な方法として「近代的都市計画」が構想されたが、それは結果的に「社会」を等閑視することとなり、それが都市の社会問題を引き起こしてきたため、今日では「社会としての健康」を確保することが大きな課題になっている、ということがその背景にある。

「個の健康」を確保する視点とは、人間と環境(自然やモノ)との関係を見る視点である。その視点では人間を取り巻く環境を「機械」とみなすことが可能であった。しかし、問題が「社会の健康」ということになると、「機械」の視点では対処し得なくなる。それは、人間と人間との関係(双方向の関係)に問題があるからである。そこに「近代的都市計画」の限界がある。

もっとも今日イメージされる「近代的都市計画」には、モノ(機能を含む)の方から人間を見るというル・コルビュジェが批判した姿勢が少なからずある。ル・コルビュジェの「輝ける都市」の基本理念は、その名のとおり、都市に住まう人々がひとりの例外もなく太陽の恵みを存分に享受できる健康的な都市をつくるというものであった。一方、日本では、都市に住むためには日照をある程度我慢しなければならない、などという実に何と云うかそういう発言があったような記憶がある。この両者を同じ「近代的都市計画」の範疇に入れるなどと言うのは、相当控えめに言ってもやはり無理というものである。

CIAM が 1933 年の第 4 回会合で採択したアテネ憲章と、1998 年に採択された新アテネ憲章なるもの(その後改定されている)とを比較してみるのも、上記の相違を確認する

ための面白い方法になるかもしれない。新アテネ憲章は社会的な結びつきを重視するなど時代の変化を踏まえた内容にシフトしているが、列挙されている内容には目新しさをあまり感じない。新しいことへの挑戦という意味では果たしてどちらが創造的なのであろうか。哲学論や現象論という観点から見ると果たしてどちらに深みがあるのであろうか。モノや機能ではなく人間が中心にいるのはどちらなのであろうか。新アテネ憲章では都市計画家の役割というのがずいぶん強調されているが、それは一体何を意味するのであろうか。それぞれの策定の背景まで含めて考察しなければ結論を出すことはできないが、この新旧アテネ憲章の比較は今日的な「近代的都市計画」の問題をあぶり出す上でとても有効であるかもしれない。

今日イメージされる「近代的都市計画」は、次の二重の課題に直面している。

モノの視点ではなく生身の人間の視点を中心に据えること

人とモノとの関係ではなく人と人との関係を視野の中心に置くこと

この両方の課題を克服すれば「都市計画」は「都市経営」へと創造的に破壊されるようにも思われる。

なお、ル・コルビュジェは「社会」の問題を視野に入れていなかったわけではない。例えば「アテネ憲章」には次の記述がある。

経済的なもの、社会的なもの、政治的なものと並んで、人間と結びついた心理的、生理的な価値が、個人的かつ集団的な問題として論争に導入される。個と集団という、人びとの性

格を支配する二つの相反する原理が協調される度合いでしか生活は開花しない。

(ル・コルビュジェ『アテネ憲章』吉阪隆正訳、鹿島出版会、1976年)

しかしながら当時の都市の劣悪な状態を踏まえて考えると「太陽、広がり、緑」等に重点を置かざるを得ないということになり、結果として「社会」が希薄になったということであろう。

以上のような次第で、これからは宇沢弘文の「社会的共通資本としての都市」が都市づくりの基本的な視点になる。昨今、「景観論」が盛んであるが、それが盛んになったのも「社会的共通資本」としての重要性からである。つまり「景観論」の本質は人と人との関係にある。それを勘違いして相変わらずモノの問題だと思っていると、都市はいつまでたっても美しくならないに違いない。

ル・コルビュジェが批判した意味での「近代的都市計画」では21世紀の都市はできない。まずは「近代」を反省し、人間と人間とのつながりを中心に据える「都市経営」を確立しなければならない。人とモノとの関係を主役にする都市計画の時代から、人と人との関係を主役にする都市経営の時代に既になっている、と言ってもよいのではなかろうか。

というようなややこしい話をするのは今回は寄り道のしすぎというもので、要するに以上で言いたかったことは「輝ける都市」には人間中心の哲学があったということである。広々としたオープンスペースの中に超高層ビルを配置するというのは既に過去のイメージではあるが、それは当時の時代状況に抗したひとつの哲学を持っていたために「輝ける都市」として歴史に残った。その時代状況

は変わってしまった。それにも関わらず「輝ける都市」のパーズのような都市を目指せば(実際にはそのパーズの広々としたオープンスペースすらないが)、「輝ける都市」には万が一にもならない。それではそれは一体何になってしまうのか。

(3) 蚊が焼ける都市

最近アメリカでは蚊の大量発生が大問題になっている。蚊の問題はとりあえず「痒い」ということであるが、それに加えて西ナイル・ウイルスなどの恐ろしいウイルスを媒介するという問題もある。このウイルスのためにカラスや動物園の鳥などは既に700羽以上死んでいるというが、人間も既にそれと同じくらい死んでいる。"Fight the Bite!" をキャッチフレーズに活動しているアメリカ CDC (Centers for Disease Control and Prevention) の公表データによれば、2002年から2005年の4年間で全米の感染者は18,361人、死亡者は700人である。感染者が特に多いのはコロラド、ネブラスカ、カリフォルニア、サウスダコタ、イリノイ、テキサスなど中西部の州であるが、ニューヨークのマンハッタンでも大問題になっている。そこでは超高層ビルの林立に象徴されるような人間活動の過密さが温かい環境をつくり、蚊が地下街等で越冬してしまう(ニューヨーク州の感染者は168人、死亡者は16人)。当局は薬剤散布等による駆除に尽力しているが、今のところ有効な策も効果のあるワクチンもない。

翻って東京はどうか、とまで書いたところで眠気覚ましに朝刊を取りに行ったら、何と偶然にも「西ナイル熱 国内初の患者」という記事が目飛び込んできた(2005年10月4日各紙朝刊)。かなり出来すぎの感もある偶

然だが、紙面には「感染が広がる恐れはない」「冷静に対処してほしい」などの記述があった。冷静に対処するためにはもちろん事態を軽視せず真剣に考えなければならない。

西ナイルウイルスが最初に発見されたのはウガンダ(ナイル川の西側)であったが、ウガンダでは西ナイル熱は子供が普通にかかる風土病で、それで子供が死ぬということはめったにないらしい。むしろかからないと免疫ができないので問題だという。そのなんでもない病気が他の国や地域に移転して免疫力のない人々を次々と重病に陥れていくのが恐ろしい感染症の典型的なパターンである。現代では空路の発達によってその感染ルートが拡大しているわけであるが、感染先の気候が熱帯化していきると、その風土に恐ろしい病気として根付いてしまうおそれもあるわけである。

ここ数年、東京でも蚊が多くなった、蚊も越冬できるようになったという話をよく耳にするようになったが、これだけホットになれば蚊だって大活躍する(何しろ10月でも30を超えているくらいだから)。都内の湿地帯を徘徊すればもう秋だというのに手や顔はポコポコになる。

このまま放っておくと東京はもっともっとホットになる。どれくらいホットになるかと言うと、ヒートアイランド学会の設立趣意書が次のように述べている。

現在の東京に代表される都市は、人口・エネルギー・物流・金融などどれ1つとっても超過密都市に変貌を遂げた。いわゆる理想都市から逸脱した状態にある。衆知のように、昨夏の東京は10年振りに記録を更新し、最高気温

39.5(大手町気象台発表)に達した。また、筆者らが観測した渋谷駅前の街路空間における1人の人間に対する放射(日射および赤外放射)の到達量は約1400Wを超え、都市環境は人間生存にとって危機的状況であることを示している。東京消防庁によれば、昨夏の熱中症急患数は892人にのぼったことが、そのことを如実に裏付けている。このままでいけば、2030年頃の東京の最高気温は43を超える(夕刻6時)と予想される。

(平成17年3月

日本ヒートアイランド学会発起人代表

齋藤 武雄)

「2030年頃の東京の最高気温は43を超え」るのでは、都心居住者はどうやって生きていくのであろうか。蚊だって夏バテしてしまう。「輝ける都市」をめざしたはずなのに気がついたら「蚊が焼ける都市」になっていたというのでは暑すぎて涙も出ない。

6. 蚊が焼ける都市にならないために

(1) ジャンクスペースを見る

大都市には超高層ビルが相応しい、近代的な都市は鉄とコンクリートでつくる、都市の中から農地を排除すべきである、良好な住環境を得るためには住宅の高層化が望ましい、などという20世紀的な型にはまった考え方は海外では既に十数年あるいはそれ以上前から行政、専門家、住民等により見直しが行なわれてきている。現実の政策においても都市のコンパクト化、住宅の中低層化等が進められてきている。日本でも20世紀的な型から脱することが21世紀の都市空間をつくるための最低条件となる。20世紀の技術革新はあくまで20世紀の創造である。それ

にはまっぴては21世紀の創造は生まれな
いであろう。

「近代的空間」を見ていると、どうしてもレ
ム・コールハースの言う「ジャンクスペース」と
いう言葉が想起される。もちろん物事には常
に両面があるわけで、単純に「ジャンクスペ
ース」のレッテルを貼って片付けるのは著しく
公正さを欠く。ここで考えなければならぬ
のは、かつては繁栄の象徴でもあった「近代
的」空間がなぜ「ジャンクスペース」の方向に
転落してきたのかということである。

「近代的空間」の「ジャンクスペース」化は、
市場経済への不信感の高まりを背景にして
いるように思われる。かつて人々は市場経済
が社会を豊かにすると信じ、市場経済を先
導する大都市や大企業、大規模建築物など
大きなものに繁栄の象徴として憧れを感じた。
しかし今や人々は大きなものが必ずしも人々
を幸せにしないとを感じるようになった。場合
によっては人々を幸せにしないどころか人々
から幸せをむしり取ることもあると知るよ
うになった。さらには地球環境をも駄目にするか
もしれないと感じるようになった。

もちろんこのような考え方はナイーブな一
面を持っているわけで、実際には大規模な
経済活動が人々の生活水準を大きく向上さ
せてきたのも事実である。しかし、その向上
のために犠牲にしてきたものが今や自分た
ちの足元をすくいはじめていると人々は感じ、
将来に大きな不安を抱くようになってきた。
かつてのように「進歩」「発展」などを安易に
信じることができなくなった。そして、それら
を信じるのができた過去の時代を懐かしむよ
うにすらなつた。それだけ将来に希望を見出
せなくなったということである。この問題をど
の程度重視するかで「近代的空間」が「ジャ

ンクスペース」に見えたり見えなかつたりす
る。

生態系も社会も考えない、ただ経済のため
の、それも内に籠もつた狭い私経済のため
の、つまりは私利私欲追求のための空間、
それが「ジャンクスペース」である。それは、
外部を見る眼には見え、内部しか見ない眼
には見えない。つまり槇文彦の言う「クローズ
ドシステム」は「ジャンクスペース」に包摂さ
れてしまつている。なぜそのような空間が都市
の中に増えてきたのか、と考へていたら最近
次の新聞記事が目に入った。

例えば巨大再開発。ぴかぴかの素材ででき
た建物や、エスカレーターでつながれ、空調
のきいた空間が広がる。しかもそこを維持す
るため、お金を落とさせるシステムが用意さ
れる。そんな空間を(レム・コールハースは)、「ジャン
クスペース(クズ空間)」と呼んできた。(中略)
その目に、近年の東京の再開発は「市場経済
が強すぎ、いつも同じ街が生まれる。寂しい限
り」と映る。(2005年10月7日朝日新聞夕刊)

都市再生を考へていると、どうしてもこの
「市場経済が強すぎ」という問題に行き着く。
この問題を正面から真剣に考へない都市再
生論は聴くにまったく値しないと考へても決
して過言ではない。市場経済を有効にコント
ロールする視点がないと超高層ビルなどが
ホイホイ建つてしまふ。ジャンクスペースから
いかに脱出するかがとても重要な課題にな
つている。そのためには、まずもつてジャンク
スペースが眼に見えなければ話が始まらない。
ジャンクスペースの性格に関してはコール
ハースが次のように述べている。

「スペースジャンク(宇宙ゴミ)」が宇宙にばらまかれた人間のゴミであるなら、「ジャンクスペース(クズ空間)」は、人類が地球上に残していく残りカスである。(中略)近代化がそのコースを走り終えたのちに残るもの、(中略)近代化の副産物である。近代化には、科学の恩恵を万人で分かち合うという理にかなったプログラムがあった。ジャンクスペースは、その究極の形、もしくは溶融形である……個々のパーツは輝かしい発明の成果であり、ハイパーテクニカルで、人間の知性と想像力と無限のコンピュータ力のもと、明快に計画されたものでありながら、その総計は、啓蒙期の終焉、そして低級な煉獄、茶番劇としての復活でしかない。(中略)ジャンクスペースは、エスカレーターと空調設備の出会いによって懐胎し、石膏ボードの孵化器で育まれてきた(この3つとも、なぜか歴史の本には見当たらない)。ジャンクスペースは空間の代役であり、傷ついた野望と、限定された期待と、しばんだ熱意のテリトリーである。ジャンクスペースは、様々なコンセプトのパミューダ・トライアングル、放置された細菌培養のシャーレであり、免疫力を低下させ、差異を無化し、決定をなし崩しにし、現実よりも意図することに価値を置く。ジャンクスペースは、階層を集積に、構成を追加に置き換える。「モア・イズ・モア」がますます現実となっている。ジャンクスペースは、爛熟と同時に栄養不良状態にある。地球全体を包むとてつもない大きさの、安らぎの毛布。なされることのない決断、とり上げられることのない優先順位、永遠になくならない矛盾、喜んで受け入れられる妥協、黙認される腐敗墮落……これらすべてを足し合わせた総計がジャンクスペースである。それは、言ってみれば、何百万の親友とともに永遠にジャクージ風呂に入っている刑をいいわたされ

たようなものだ……。

(レム・コールハース「ジャンクスペース」

山田和子訳、『建築文化』2003年4月号)

現代の大都市の中で増殖しつつある空間、思考パターン、人間関係を思い浮かべると、ジャンクスペースの概念が極めて説得力のあるものに思えてくる。

(2) 型を壊す

ジャンクスペースを維持するために金を落とさせるのか、金を落とさせるようにつくるからジャンクスペースになるのか、いずれにしてもすべてが市場経済に吸収されてしまうように都市空間がジャンクスペースに吸収されてしまうようなことになると、それが都市の墓場ということになる。これは極めて深刻な問題である。「いつも同じ街が生まれる」というのは「型」にはまってしまっているからであろうが、まさに「型」にはめるのが市場経済の得意技であり強さである。

都市づくりが型にはまってしまうと、歴史も文化も風土も生態系も視野から消えていく。どこへ行っても同じような空間構成、同じような公開空地、同じような超高層ビルができてしまう。超高層ビルの表面にだけ変わった化粧を施したりするとますます同質性が強調されて惨めなことになったりもする。

型というのは市場経済に都合よく出来たものであるから、それにとらわれればますます「市場経済が強すぎ」になる。また、「市場経済が強すぎ」だからますます型が広がっていく。型にはめるというのは「近代」の大きな特色であるから、それにはまっている限りはあらゆる努力が近代に回収されてしまい、近代を超えることがなかなかできない。

昨今さかんになっている景観論の背景にも型が「美しい都市」をつくってしまったという反省があるはずである。しかし、その景観論自体が型にはまってしまうと本質的には同じことの繰り返しになってしまう。そういうことが「近代」の中では容易に起こってしまう。そのような意味で、「美しい都市」をつくるという挑戦は「蚊が焼ける都市」をつくらないという挑戦と同質のものである。

型にはまれば「綺麗な都市」はできても「美しい都市」はできない。景観論の文献で紹介されている内外の多くの写真を見ると、それらの多くは「美しい都市」ではなく「綺麗な都市」のように見える。この点に関しては千住博の次の指摘が都市にも当てはまる。

形式で描くということは、魅力に満ちている大自然をどうしても「型」で見えてしまうことです。鳥や風景や花がどんなに面白くても、描かれた絵が面白くない場合、これはどうしても形式で見てしまっているからです。描き方の「型」を進めて、そして仕上げ方の「型」に入れてしまっているからです。面白くない絵は描いてはいけません。

(千住博『絵を描く喜び』)

光文社新書、2004年)

「面白くない都市」はつくってはならない。それは「綺麗な都市」かもしれないが「美しい都市」ではないからである。型にはまると綺麗で蚊が焼ける都市ができてしまう。人間が型にはまる原因は、その方が自分にとって都合がいいからである。それで型にはめる仕組みが暗黙の合意の下で再生産される。そして社会が硬直化していく。雪崩を打って破局に突き進んでいることがわかっていても誰

も止められない(止めたがらない)ということになる。クマネズミが集団で海に飛び込むようなことになる。この流れを変えるためには、流れに棹をささず水をさす人間が数多く出てくるが必要になる。そう考えると、イギリスの都市再生政策や新しい都市農村計画がコミュニティ形成に重点を置き、そのコミュニティ形成の基礎として教育に重点を置いている意義がとてもよく理解できる。

7. 都市の未来

超高層ビルは必要でなければ建てないほうがよい。維持管理コストを考えるとこれからの人口減少時代に大量の超高層ビルをメンテナンスしていくのは大変である。超高層ビルの必要性は20世紀に比べて大きく低下しているであろうし、そもそも大都市の必要性すら急速になくなってきている。ドラッカー『テクノロジストの条件』に次の記述がある。

IT がもたらす社会的な影響として重要なものはいくつもある。その一つが、おそらくというよりはほとんど確実に20世紀型の大都市にもたらすであろう変化である。20世紀型の大都市は、19世紀の偉大なイノベーション、すなわち人を仕事の場に運ぶ能力によって実現された。汽車、電車、自転車、自動車人が人を動かした。21世紀にはこの20世紀に行なわれた最も偉大なイノベーション、すなわち仕事を人のいる場所に運ぶ能力によって変えられる。これからは人ではなく思考と情報が動く。

すでに東京、ニューヨーク、ロサンゼルス、ロンドン、パリ、ムンバイなど、20世紀型の大都市は役に立たなくなってしまった。(中略)仕事を人のいる場所、すなわち郊外に運ぶことはすでに始まっている。

(P. F. ドラッカー『テクノロジストの条件』

上田惇生訳、ダイヤモンド社、2005年)

これは既に各方面で言われてきていることであるが、ヒートアイランドを解消するという観点からはとてもいい話である。同書はさらに次のように述べる。

1970～80年代における不動産ブームと高層ビルの建設ラッシュは、大都市の成功を示すものではなかった。それは衰退の始まりを示すにすぎなかった。衰退のスピードはゆっくりかもしれない。しかしわれわれは、もはやあの偉大な成果である大都市を必要としない。少なくとも現在の形態と機能のものは必要としない。

都市の「テクノロジストの条件」を満たす人はこの点についてどう分析しているのだろうか。「東京には人が集まってくるから大丈夫」などと言う人もいたが、「大丈夫」と言ってしまふところが既に大丈夫でない。

おわりに

日本の都市にとって今最も必要なことは人工物を減らすことである。人口はこれから大きく減っていく。情報技術の革新も進んでいる。人間を都市の真中に集める必要はなくなっていく。「対面情報がますます重要になる」と言う人もいるが、それは「世界の終わり」をもたらす「ハードボイルド・ワンダーシティ」をつくることにならないだろうか。人々に甚大な健康被害をもたらすようなことにでもなれば対面情報も何もあったものではないと思うのだが。